



新しい五千円札の顔となる津田梅子。6歳で女子留学生の一員として渡米し、17歳で帰国する途上、「日本の女性のための学校をつくろう」と夢を描いた。その学校を前身とする津田塾大学の高橋裕子学長は、梅子研究の第一人者。日本の女子教育のパイオニアとなった梅子の足跡を、その内面や思索にも迫りつつ、内田眞一副総裁と語り合った。



日本銀行副総裁

内田眞一

UCHIDA Shinichi

1986年東京大学法学部卒業後、日本銀行入行。2007年企画局参事役、08年総務人事局参事役、10年新潟支店長、12年企画局長、17年名古屋支店長、18年日本銀行理事、22年日本銀行理事再任、23年3月日本銀行副総裁就任。

津田梅子の生涯とその志を継ぐ 女性リーダーが変える社会



津田塾大学学長

高橋裕子

TAKAHASHI Yuko

1980年津田塾大学学芸学部英文学科卒業。83年米国カンザス大学大学院歴史学研究科修士課程修了。84年筑波大学大学院地域研究研究科修士課程修了。89年カンザス大学大学院教育学研究科博士課程修了。Ph.D. (教育学)。専門は米国社会史(家族・女性・教育)、ジェンダー論。桜美林大学国際学部専任講師、同助教授を経て、97年から津田塾大学学芸学部英文学科助教授、2004年から同教授。16年からは同学長を務める。この間、03年にスタンフォード大学、13年にはウェルズリー大学でフルブライト研究員も務めた。著書に『津田梅子の社会史』(玉川大学出版部、アメリカ学会清水博賞受賞)、『津田梅子——女子教育を拓く』(岩波ジュニア新書)。共編著に『津田梅子を支えた人びと』(有斐閣)、『女性学長はどうすれば増えるか——国内外の現状分析と女性学長からのメッセージ』(東信堂)など。

米国家庭への留学が原点
明治の女性に扉を開いた

内田 日本銀行では新紙幣三種類について七月三日に発行を開始し、流通を始めます。その中で、五千円札の新たな肖像となる津田梅子の研究において高橋先生は第一人者でいらっしゃいます。この機会に、梅子の生涯や実績が広く知られるといいなと思っています。高橋 私もそのように強く願っています。梅子は「日本初の女子留学生」と紹介されることが多いのですが、その留学先の米国では女性が紙幣の肖像になったことはありません。日本のジェンダーギャップ指数ランキングが国際的に低い中で、女子教育のパイオニアであり、現在も継続する私塾(津田塾)を創立した起業家でもある梅子を選ばれた。国内外の人々に梅子のことをもっと知っていただきたいです。

内田 本当にそう思いますね。私自身も、これまで梅子については六歳の時に岩倉使節団に同行して米国に渡ったこと、津田塾大学

の前身である私塾（女子英学塾）を創立したことを知っているくらいでした。今回、高橋先生のご著書を読み、明治から大正にかけての近代教育の草創期を代表する一人であったと認識しました。ご著書は梅子の人物像をいきいきと描き出していて、読み物としても大変面白いと感じました。

高橋 梅子は、ワシントンD.C.の日本弁務使館に勤務する森有礼ありのりの書記官、チャールズ・ランマン夫妻に七歳で託され、約一〇年間夫妻の自邸に身を置きました。一八歳になる直前に日本に戻りましたが、帰国後、ランマン夫妻宛てに膨大な書簡を送っています。それらは *The Attie Letters* と題する本にまとめられています。帰国後の梅子が常に財政的な心配をしていたこともつづられているんです。米国滞在は官費留学生でしたが、帰国後は日本語が不自由になったことに加え、生計を立てるための職が男子の留学生のように用意されていなかった。今、津田塾大で学ぶ学生たちと同じ年齢の頃に、梅子も自分の道をどう切

り拓くか、思い悩んでいたのです。**内田** 梅子を含む五人の官費女子留学生たちが米国に派遣されたのは明治初期の一八七一年。具体的には明治初期の一八七一年。具体的に計画したのは、当時樺太専任開拓使次官の黒田清隆や、森有礼などでした。彼女たちは男性の留学生よりずっと年下でしたが、これは何か意図があったのでしょうか。

高橋 日本の少女に米国のホームライフを経験させる、という狙いがありました。男子のエリートを派遣する場合は特定の明確なゴール——日本の近代化に必要な鉱業や鉄道などを学ばせる狙い——がありました。米国の家庭は男子のエリートがなかなか分け入ることのできない領域だったわけです。黒田をはじめ明治のリーダーたちは米国の女性の家庭内外で及ぼす影響力に注目していました。日本の女子が米国家庭で成長して帰国することが、近代化・文明化に資すると思ったのです。米国女性のありようは、梅子の中に自然と吸収されていきました。**内田** それが梅子の原点となり、日本で教育者の道を歩み、そして

一九〇〇年には女子英学塾を創立します。その時、梅子はどのような女性を育てたいと思っていたのでしょうか。

高橋 「all-round women」は梅子が開校式の式辞で使った言葉です。式辞は日本語でしたが、唯一この言葉だけは英語でした。当時は、良妻賢母という規範の下でしか女子教育が考えられておらず、旧制高等学校や帝国大学に女子の入学は許されません。そんな明治の時代にあつて、梅子は女性にリベラルアーツ教育の扉を開き、広い視野を獲得してほしいと願っていました。

しかし広い視野を獲得するだけでは、自立した個人として生きていけない。梅子は、女性も経済的自立を可能にする職能を持つように促しました。リベラルアーツとともに専門教育を重視し、「英学」を修めて高等女学校の英語教員になるキャリアパスを示しました。「all-round women」という日本語には置き換えられない言葉。梅子はそのに、女性が自立した個人となり、世界で活躍してほしいという思いを込めたのです。

奨学金を創設し 後進の女性にも留学への道

内田 米国に官費留学した五人の女子のうち、二人が一年弱で日本に帰国しましたが、最年少だった梅子のほか、永井繁子と山川捨松は留学期間を全うしました。ただ、繁子も捨松も帰国後すぐに結婚。梅子はどう思ったのでしょうか。

高橋 繁子は米国で出会った日本海軍の瓜生外吉と婚約をしていました。しかし捨松は梅子と日本に船で帰る途上、「日本の女性のための学校をつくらう」と夢を語り合い、しかもヴァッサー大を卒業して日本女性として初の学位を得た人でした。梅子とすれば自分は捨松をアシストする役目であると考えていました。その捨松が帰国後ほどなくして政府高官の大山巖と結婚したことに、梅子は少なからず落胆しました。繁子と捨松、それにランマン夫人のアデラインも梅子を心配して結婚を勧めたのですが、梅子はアデライン宛ての書簡で「私は自分の学校をつくりたいのです。結婚はしません」と、驚くほどきっぱりと宣言したのです。

梅子と捨松の道は分かれたよう

に見えますが、捨松は大山巖との結婚で社会的により大きな影響を及ぼすことができると考えたのだと思います。政府高官の妻という立場から、梅子への協力を惜しまなかった。例えば捨松は官立の華族女学校の創設準備委員となつて、帰国後三年間も正規の教職に就く機会がなかった梅子を同女学校の教授補に迎えたり、女子英学塾を社団法人化する際には大山捨松の名を申請書の筆頭に書いたりしました。これまで捨松と梅子の二人については結婚を選択した女性と独身を選択した女性という対立的な描き方で取り上げられたことも少なくありません。実際はそんなに単純ではなく、帰国の途上で語り合った「学校をつくる」夢は梅子が主導し、捨松が後方から力強く支援する形で進展していきしました。

内田 女子英学塾の創立・運営に当たっては、梅子は米国で知己を得た人々からも協力を得ています。

高橋 日米から非常に強く支えてもらえる、そういう魅力が梅子は持っていたんだろうと思います。

梅子は学校をつくる前に奨学金

制度もつくっています。きっかけ

は二度目の米国留学。二四歳から二年間、プリンマー大で生物学を専攻しました。後にノーベル賞を受賞するT・H・モーガン博士の下でカエルの卵の発生の研究をし、博士と共著論文も書いた。梅子はその二年間がとても充実していたので、自らが得た高等教育の機会を日本女性たちと分かち合いたいと、米国で学ぶための奨学金制度を考えたのです。篤志家のモリス夫人やプリンマー大のM・ケアリ・トマス学部長らが親身になってファンドライジングを支援してくれました。梅子は目標の八〇〇〇ドルを一年間で集めて「日本女性米国奨学金」を創設。その資金により、なんと一九七六年まで累計で二五人の日本女性たちがプリンマー大などで学びました。

内田 梅子は自分が留学しただけでなく、未来の日本女性たちにも機会を拡大した。普通は、自分の勉強だけでも精一杯でしょうから、素晴らしいことだと思います。

高橋 梅子が二度目の米国留学をした頃は、米国社会の中産階級の女性たちの間に高等教育支援運動があった時期でした。梅子はその

潮流を捉え、ホップ・ステップ・ジャンプしていく力とした。プリンマー大で生物学を修めたことをホップとすれば、次のステップで日本女性たちのための奨学金をつくり、そして日本での私塾創立へとジャンプしました。奨学金創設に協力してくれた米国の女性たちは、日本で女性の高等教育を開始するという梅子の夢も理解して、女子英学塾創立に原資をもたらず寄付母体となったのです。

梅子の夢から今につながる 女子大学でのリーダー育成

内田 梅子がプリンマー大で生物学を専攻したことは興味深いです。理系分野を選んだのは、どんな思いがあったのでしょうか。

高橋 梅子は英語の教授法を学ぶというところで二度目の留学に赴きましたが、プリンマー大では歴史学や英文学を学び、さらに生物学も取ってみてこれも面白いと思ったのでしよう。ただ当時、米国でも、女性が男性と伍して高度な研究をしたりアカデミックトレーニングを受けたりすると、健康を害して生殖機能に悪影響を及ぼすと警鐘が鳴らされていたのです。そ

れに対しトマス学部長は、女性も男性と同等の学問への潜在能力があるということを実証したいと考えていました。

内田 モーガン博士との共著論文など、梅子は結果を残してそれを実証したといえますね。津田塾大も理系の学科をお持ちです。

高橋 津田塾大は昨年、理科創設八〇周年でした。第二次大戦中、国の方針で英語が敵性語とされた際に理科を設け、その後は数学科、情報科学科に改組し、そういった分野で活躍する女性を数多く輩出できたことは、梅子も喜んでいるのではないかなと思います。

内田 日銀にも津田塾大の出身者が多数在職し、その多くは情報システム関係の仕事に携わっています。彼女たちが日本の決済システムの中枢を担っている。大変ありがたいと思っています。

欧州では、中央銀行デジタル通貨(CBDC)を発行するという議論が進んでいます。デジタル社会にふさわしい形で、中央銀行が果たしていくべき役割は何か、常に考えていかなければなりません。その中で、日本銀行にとってシステムに関する仕事は、ますます



す重要になってくると思います。

女性の大学教育という意味では共学の大学で学ぶという選択もあるわけですが、女子大学の意義や役割についてどうお考えですか。

高橋 昨年、ある女子大学が新規学生募集を停止すると発表したところ、女子大学の役割は終わった、良妻賢母の教育はもう古いというネット記事がたくさん出ました。それは射た話ではありません。女子大学も多様ですが、津田塾大は良妻賢母を謳ったことはなく、変革を担う女性リーダーの輩出を教育のモットーに掲げています。女子大学の学生は、男性

がいないことで性役割から自由になれる。ゼミでも課外活動でも、すべての場面で常に女子学生が中心になる。そういう状況は社会に出てからはなかなかないでしょう。ジェンダーギャップ指数（二〇二三年）が世界一四六カ国中一二五位の日本では、女性はいまだに社会の周縁に置かれています。だからこそ意見を述べてたりリーダーシップを取ったりすることが重要です。そのメンタリティーと基盤を女子大学で身につけることができるのではないかと思います。

内田 むしろ女子大学だからこそリーダーを輩出できると。

高橋 はい。女子大学にはロールモデルとなる女性に出会いやすいというメリットもあると思います。副総裁は大学生の時、女性の先生から何単位を取られましたか。

内田 四〇年前のことですが、たぶん、ないと思います。逆に、三〇年前、米国の中央銀行のFRBに出身した時は、上司が三人とも女性で、そのうちお二人はお子さんを育てながら勤めておられました。

高橋 私自身は、学部で取得した

単位の六〇七割が女性の先生からでした。二〇代後半ぐらいから、三〇代、四〇代、五〇代、六〇代と、多様なライフステージの女性たちをロールモデルとして見上げながら大学生活を送れた。私自身の人格形成にとっても大きな影響があったと思います。

米国の大学院に留学していた時も、履修した授業の半分弱は女性の教授から習いました。三人のお子さんの育児をしながら素晴らしい本も書いている、そんな女性教授を目の当たりにして、自分も将来そのようにできるかもしれないと感じたものです。

対照的に、国内の共学の大学院で学んだ時には、私の研究科に女性は一人もいなかった。現在でも日本の四年制大学進学率は男女で約一〇ポイントの差があります。大学院進学率ではさらに差がつか。大学における女性と男性の割合は学部、修士、博士と進むにつれて差が大きくなります。大学の上位職——教授や副学長、学長職になると女性の割合は著しく減少します。

内田 女子大学は女性の学長が多いのかと思ったら、そうではない

のですね。

高橋 女子大学も学長は男性のほうが多いのです。日本の大学生たちはこういう風景を見ながら育っています。ジェンダーギャップを改善させていく、政治経済分野で頭角を現す女性たちを輩出していくためには、大学の風景を変えていかなくてはならない。それには大学生はもとより、大学を目指す高校生から意識を変えてもらう、そういう必要があると思います。

内田 お札の肖像に津田梅子を選ばれたということも、その一助になればと思います。教育者であり起業家でもある女性が選ばれ、日本のお札として世の中に流通していくことは重要な意味を持つように思います。

高橋 梅子が肖像に決定したと発表された日、教え子からメールが来たんです。「二〇二四年からは五千円札を見るたびに母校を思い出せそうで嬉しくもあり、お財布を開けるたびに襟を正し精進せよと言われるような心持ちでもありません」と。このような女性がたくさん出てくるように祈っています。

内田 今日は大変良いお話をありがとうございました。